

笠岡市人権啓発バンク会長

高木勇三

井原と笠岡で川柳の講座を受け持っています。合わせて50人程の川柳愛好の皆さんが熱心に学んでいます。

実は、これこそ生涯学習だと思うのですが、講座の平均年齢は70歳を軽く超えています。暑さ寒さもいとわず、皆さん元気に通ってこられます。

でも、誰かが続けて休むと、
「○○さんはどうしちゃったんじゃろーか」
「お悔やみ欄にゃー出とらなんだで」

「なにゅーよーるん。ピンピンしてるがな、孫と一緒にハワイ旅行に行つとんじやが」
と和氣諒々あいき(?)の会話が続きます。

3月が来ると誰かが言い出します
「もう年じゃけー、わたしやー4月からよー来んで」
そうすると、まわりのみんなが寄つてたかつていじめます。

「わたしより若けーのに、なにゅー生意気なことーよーんなら」

「あんだ、来んようになったら絶対
に呆けるで」

「まだ80(歳)も来んのに10年早えーわー」と、これは85歳の最長老の言。結局、新年度もお馴染みの顔が揃います。

そして、嬉しいことに毎年のように新入生も加わります。自己紹介の時には、名前や講座志望の動機などについて話していただきますが、それ以外にも古狸の先輩から質問が飛びます。

「お歳はお幾つになられましたか？」
新入生は殊勝に答えます。
「今年古希こきを迎えます」

「あらー若いんじやなー、うらやましいわー」

この集団の中では、70歳はまだまだ
湧ほ垂れ小僧の部類に入るようです。

私は、紙と鉛筆があれば川柳は誰にでも作れますとよく言います。これは厳密に言うの間違いです。

心が塞がっている時には川柳は作れません。不安や悩みや悲しみに押し潰されそうになりながら、それは生きていくだけで精一杯なのです。

70歳代の女性が夫を亡くされました。しばらくして講座をやめると連絡が入りそれっきりでした。ところが半年程してまた出てこられました。「お葬式のあと、何をする気力もな

くだだばんやりと過ごしていました
が、ある時川柳の本を見ていてひどく懐かしい気がしました。私にはこれしかないと思えました。またお世話になります」

よく聞いてみると、講座の仲間が入れ替わり立ち替わりお宅を訪ねたり電話をしていたようでした。

今ではすっかり立ち直られて佳句秀句を連発されています。

古城山の南斜面に、みんなで「笠岡川柳公園」を作りました。御影石の句碑が50基ほど建っています。昔はよくお墓と間違えられました。設置基数も増えて今ではそれなりに趣も出てきました。

この句碑の建立資格は全国公募の川柳大会の最優秀句に与えられます。1回の大会につき500〜800の応募句の中から第1位に輝いた句が、自筆の文字を彫り込んだ川柳句碑を建ててもらえるのです。嬉しいことに講座生の中から既に5人の方が獲得されています。もちろん私の句碑もあります。(エッヘン)

川柳は風景を詠むものではありません。人の姿と心を詠むものです。作句技術以上に、読者の心の琴線に触れる真剣さが求められます。

講座の中で私はいつも言っています。五・七・五の17文字の中で、原

稿用紙50枚以上のドラマを想像させて下さいと。

これを具現化した川柳を一つ。

宮本武蔵の作者として有名な大衆文学作家の吉川英治をご存じですね。彼はベストセラー作家となる前の不遇の時代に吉川雉子郎きしの柳名で川柳を作っていました。当時もそれなりに認められており、そのまま川柳を続けていたなら一時代を画していたのではないかと言われています。

彼の句に

「貧しさもあまりの果ては笑ひ合心」というのがあります。年老いた母と妻子を抱えて、貧困にあえぎ、万策尽き果て、ただ笑うしかない哀しさの背景に凄絶な人間ドラマが見えてくるような気がしませんか。

さて、深刻な話になってしまいましたが、最後は春らしく明るい句で締めましょう。

煩惱がそろりと動く春の風 次男

金欲・物欲・名誉欲と、人間はいろいろな欲を持っています。この場合はすこしエッチな欲ですね。「そろりと動く」が人間らしくていいですね。

うきうきと仏も鬼も花の莫産ごぞん

勇次郎

せめて花見ぐらい呉越同舟の無礼講で楽しくやりましょう。